



至矣盡矣。而舜復益之。以三言者。則

所以明夫堯之一言。必如是而後可

度幾也。蓋嘗論之心之虛靈。知覺一

而已矣。而以爲有人心道心之異者。

則以其或生於形氣之私。或原於性

命之正。而所以爲知覺者不同。是以

或危殆而不安。或微妙而難見耳。然

人莫不有是形。故雖上智不能無人

心。亦莫不有是性。故雖下愚不能無

道心。二者雜於方寸之間。而不知所

以治之。則危者愈危。微者愈微。而天

理之公。卒無以勝夫人欲之私矣。精

則察夫二者之間。而不雜也。一則守

其本心之正。而不離也。從事於斯。無

少間斷必使道心常爲一身之主而
人心每聽命焉則危者安微者著而
動靜云爲自無過不及之差矣夫堯
舜禹天下之大聖也以天下相傳天
下之大事也以天下之大聖行天下
之大事而其授受之際丁寧告戒不
過如此則天下之理豈有以加於此
哉自是以來聖聖相羨若成湯文武
之爲君皋陶伊傅周召之爲臣既皆
以此而接夫道統之傳若吾夫子則
雖不得其位而所以繼往聖開來學
其功反有賢於堯舜者然當是時見
而知之者惟顏氏曾氏之傳得其宗
及曾氏之再傳而復得夫子之孫子

思則去聖遠而異端起矣。子思懼夫

愈久而愈失其真也。於是推本堯舜

以來相傳之意質以平日所聞父師

之言更互演繹作為此書以詔後之

學者蓋其憂之也深故其言之也切

其慮之也遠故其說之也詳其曰天

命率性則道心之謂也其曰擇善固

執則精一之謂也其曰君子時中則

執中之謂也世之相後千有餘年而

其言之不異如合符節歷選前聖之

書所以提挈綱維開示蘊奧末有若

是之明且盡者也自是而又再傳以

得孟氏為能推明是書以兼先聖之

統及其沒而遂失其傳焉則吾道之

所寄不越乎言語文字之間而異端
之說日新月盛以至於老佛之徒出
則彌近理而大亂真矣然而尚幸此
書之不泯故程夫子兄弟者出得有
所考以續夫千載不傳之緒得有所
據以斥夫二家似是之非蓋子思之
功於是為大而微程夫子則亦莫能

因其語而得其心也惜乎其所以為
說者不傳而凡石氏之所輯錄僅出
於其門人之所記是以大義雖明而
微言未析至其門人所自為說則雖
頗詳盡而多所發明然倍其師說而
淫於老佛者亦有之矣熹自蚤歲即
嘗受讀而竊疑之沉潛反復蓋亦有

年一旦恍然似有以得其要領者然
のちいほあてらるるをうせんと
 後乃敢會衆說而折其衷既為定著
せりそのらうとすまふため
 章句一篇以竢後之君子而一二同
しやうく ちやうへんと ちやうてまら のちの くんしと
 志復取石氏書刪其繁亂名以輯略
しやくふ ちやくて せきせいしやう せん はんらん 名 ちやくて げつりやく
 且記所嘗論辨取舍之意別為或問
ちやくて じやく しょ ちやくて ろん へん じやく せ け じやく ちやくて じやく
 以附其後然後此書之旨支分節解
ちやくて つく せいの ちやくて ちやくて のちの ちやくて
 脉絡貫通詳略相因巨細畢舉而凡
まきらく かん ちやくて ちやくて ちやくて ちやくて ちやくて ちやくて
 諸說之同異得失亦得以曲暢旁通
しよ せつ の ちやくて ちやくて ちやくて ちやくて ちやくて ちやくて
 而各極其趣雖於道統之傳不敢妄
ちやくて ちやくて ちやくて ちやくて ちやくて ちやくて ちやくて ちやくて
 議然初學之士或有取焉則亦庶乎
ぎ ちやくて ちやくて ちやくて ちやくて ちやくて ちやくて ちやくて
 行遠外高之一助云爾淳熙己酉春
ちやくて ちやくて ちやくて ちやくて ちやくて ちやくて ちやくて ちやくて
 三月戊申新安朱熹序
ちやくて ちやくて ちやくて ちやくて ちやくて ちやくて ちやくて ちやくて

中庸の義を論ずるなり
中庸の義を論ずるなり
中庸の義を論ずるなり
中庸の義を論ずるなり
中庸の義を論ずるなり
中庸の義を論ずるなり
中庸の義を論ずるなり
中庸の義を論ずるなり
中庸の義を論ずるなり
中庸の義を論ずるなり

君子慎其獨也喜怒哀樂之未發謂之中發而皆中節謂之和中也在天下之大本也和也者天下之達道也致中和天地位焉萬物育焉

右第一章于思述所傳之意以立言首明道之本原出於天而不可易其實體備於已而不可離次言

中庸の義を論ずるなり
中庸の義を論ずるなり
中庸の義を論ずるなり
中庸の義を論ずるなり
中庸の義を論ずるなり
中庸の義を論ずるなり
中庸の義を論ずるなり
中庸の義を論ずるなり
中庸の義を論ずるなり
中庸の義を論ずるなり

存養省察之要終言聖神功化之極蓋欲學者於此反求諸身而自得之以去夫外誘之私而充其本然之善楊氏所謂一篇之體要是也其下十章蓋于思引夫子之言以終此章之義
仲尼曰君子中庸小人反中庸君子

又曰... 信不遠... 說... 仁...

仁... 中華... 天子... 保之... 得其名...

乃... 後... 德者... 子曰... 父以武王...

乎如在其上... 格思不可度... 誠之不可揜... 子曰舜其大孝也...

天子富有四海之內... 保之故大德必得其位... 得其名必得其壽... 其材而篤焉...

詩曰嘉樂君子... 受祿于天... 德者必受命... 子曰無憂者其惟文王乎... 父以武王為子... 纘太王王季文王之緒...

この外をくわくすは
へ王仁にまじりてを
國の人みまきと稱
るは倭語の類も
すし形く王仁矣は
乃人として世方の
於てつらむとて
離るる只異國の
音とて異國の漢
とてゆふふとて
を後中華乃まき
多く傳ふことよま
教ひらまるとの
名を定ゆりては
教もあつたりと

中華の文字を民間
まてにゆつたを
よみてまよたまま
と漢の中華の字
を翻して倭語と
なしてまよふ倭
倭語をゆつて中
華のまよふ倭小其
まよと顛倒せまよ
まよを通ぜまよ
まよ顛倒の倭と
まよまよまよの
まよ何人のまよま
まよまよまよまよ
まよまよまよまよ

酬下爲上所以逮賤也燕毛所以序
齒也踐其位行其禮奏其樂敬其所
尊愛其所親事死如事生事亡如事
存孝之至也郊社之禮所以事上帝
也宗廟之禮所以祀乎其先也明乎
郊社之禮禘嘗之義治國其如示諸
掌乎 右第十九章

哀公問政子曰文武之政布在方策
其人存則其政舉其人亡則其政息
人道敏政地道敏樹夫政也者蒲盧
也故爲政在人取人以身脩身以道
脩道以仁仁者人也親親爲大義者
宜也尊賢爲大親親之殺尊賢之等
禮所生也在下位不獲乎上民不可

ゆえに只くこれに
 讀てそを多きを
 と舟のしとく倭侯
 の甚く我に害
 する事と云ふは
 凡言倭の道中
 華と云ふ因と大
 小矣なり中華の
 者ハ中華の之流
 かしと目し人の
 之流とこれと後
 心日本の人を流
 一異なり事とし
 華流ハよありト
 小なりをいふト
 之の如くもそを
 を異し不敢と
 敢不と云ふは
 敢の字不は字の
 下ふありあり不
 の字乃よふあり不
 敢と敢と云ふ義
 ゆふ相及す然ふ
 倭讀してありて
 ゆふふ必先ふ云
 とおふ事あり
 不必必不と云ふ
 又よふありと云ふ
 の教字教ふこと

國家有九經曰脩身也尊賢也親親
 也敬大臣也體群臣也子庶民也來
 百工也柔遠人也懷諸侯也脩身則
 道立尊賢則不惑親親則諸父昆弟
 不怨敬大臣則不眩體群臣則士之
 報禮重子庶民則百姓勸來百工則
 財用足柔遠人則四方歸之懷諸侯
 則天下畏之齊明盛服非禮不動所
 以脩身也去纓遠色賤貨而貴德所
 以勸賢也尊其位重其祿同其好惡
 所以勸親親也官盛任使所以勸大
 臣也忠信重祿所以勸士也時使薄
 斂所以勸百姓也日省月試既稟稱
 事所以勸百工也送往迎來嘉善而

もむれ處ありて
願倒し後い必き
とじらふなり又注
しく願倒し後い
きまありて中華
ふんそつての教を
日本もたれずし
おれをのりて多
ふまゆら故ふし
あきつてかたじけ
と中華の人目そ
えりて成いふも
とのひ觀さのひ
とのひ察さのひ
とのひ勝さのひ
とのひ相さのひ見
とのひ觀さのひ
のどく諸般の云
ありて其のゆか
く殊なりんを國
乃人いさるを
とばふ止れ耳と
さくしんぬる小
とのひ聆さのひ
さふとり國の人
きくといふけれ
止め千言萬語れ
くのどく物の名
と爵觸解危杯益
は皆酒名と其制

矜不能所以柔遠人也繼絕世舉廢
國治亂持危朝聘以時厚往而薄來
所以懷諸侯也凡為天下國家有九
經所以行之者一也凡事豫則立不
豫則廢言前定則不跲事前定則不
困行前定則不疚道前定則不窮在
下位不獲乎上民不可得而治矣獲
乎上有道不信乎朋友不獲乎上矣
信乎朋友有道不順乎親不信乎朋
友矣順乎親有道反諸身不誠不順
乎親矣誠身有道不明乎善不誠乎
身矣誠者天之道也誠之者人之道
也誠者不勉而中不思而得從容中
道聖人也誠之者擇善而固執之者

其のく珠をるを
乃人へはらぎとふ
の名を通用して其
おもむくをうむれ
事をもとむる事
皆世類なり又倭讀
典助於辭を捨て
漢ざる由えわゆる
助字をれり用ひ
とかりて自然に筆
鋒のまを流るる
なり今の世に儒者
をくまらざるを
經術と法とを頗れ
發明するをわれを
靴と袴とを痛と控
がらくはるは倭
の習ひ顛例の弊
俱に痼疾とす
其靈智を昧ま
ゆかり呆然とせ
するは然るを
文章と信ふを
優劣の習と除
ざるを必とす義
と俱り顛例乃弊
をるるをばらめ
文理を遠ふなり
著述を多しとい
ふと利を海を

也博學之審問之慎思之明辨之篤
行之有弗學學之弗能弗措也有弗
問問之弗知弗措也有弗思思之弗
得弗措也有弗辨辨之弗明弗措也
有弗行行之弗篤弗措也人一能之
己百之人十能之己千之果能此道
矣雖愚必明雖柔必強 右第二十章
自誠明謂之性自明誠謂之教誠則
明矣明則誠矣
右第二十一章子思兼上章夫子天道
人道之意而立言也自此以下十二章
皆子思之言以及覆推明此章之意
唯天下至誠為能盡其性能盡其性
則能盡人之性能盡人之性則能盡

勞して功をせし
日本の号を老成を
なり終るを名備
の國字を公の傳
後顛例の傳とて
トわつた後の學
老ふ其の意と喟
しやるるふわすや
世毒の骨髓
偏く除きつじ
あつたを陰ん
心華の瓜がふ
ちくは華の瓜
中華の俗説あり
今の唐の俗説あり

助語辭之說

凡文章に助語を
いふて辭となすけ
久のりく張わす
と字あり亦は句
と字切れを
用の鳥小なれ
ばも翼二足のとく
あつたのなり
平歇邪
平の字多く人疑
ていふて定むる
辭あるは向の語
とすなり

物之性能盡物之性則可以贊天地
之化育可以贊天地之化育則可以
與天地參矣
右二十二章

其次致曲曲能有誠誠則形形則著
著則明明則動動則變變則化唯天
下至誠為能化
右二十三章

至誠之道所以前知國家將興必有
禎祥國家將亡必有妖孽見乎蓍龜
動乎四體禍福將至善必先知之不
善必先知之故至誠如神
右第二十四章

誠者自成也而道自道也誠者物之
終始不誠無物是故君子誠之為貴
誠者非自成已而已也所以成物也

物之性能盡物之性則可以贊天地
之化育可以贊天地之化育則可以
與天地參矣
右二十二章

其次致曲曲能有誠誠則形形則著
著則明明則動動則變變則化唯天
下至誠為能化
右二十三章

至誠之道所以前知國家將興必有
禎祥國家將亡必有妖孽見乎蓍龜
動乎四體禍福將至善必先知之不
善必先知之故至誠如神
右第二十四章

誠者自成也而道自道也誠者物之
終始不誠無物是故君子誠之為貴
誠者非自成已而已也所以成物也

誠者自成也而道自道也誠者物之
終始不誠無物是故君子誠之為貴
誠者非自成已而已也所以成物也

誠者自成也而道自道也誠者物之
終始不誠無物是故君子誠之為貴
誠者非自成已而已也所以成物也

誠者自成也而道自道也誠者物之
終始不誠無物是故君子誠之為貴
誠者非自成已而已也所以成物也

誠者自成也而道自道也誠者物之
終始不誠無物是故君子誠之為貴
誠者非自成已而已也所以成物也

誠者自成也而道自道也誠者物之
終始不誠無物是故君子誠之為貴
誠者非自成已而已也所以成物也

誠者自成也而道自道也誠者物之
終始不誠無物是故君子誠之為貴
誠者非自成已而已也所以成物也

誠者自成也而道自道也誠者物之
終始不誠無物是故君子誠之為貴
誠者非自成已而已也所以成物也

誠者自成也而道自道也誠者物之
終始不誠無物是故君子誠之為貴
誠者非自成已而已也所以成物也

歟字邪の字は
絶の終意を以て亦
乎乃字の意を兼す
世之字は人小對して
説語成してこそ成
實とてこれのめ
あり。邪の字はゆ
疑ひ怪しき事なる
ころのゆかりあり

其の字はこゝにその
事物に括くして
於の字は俗終。這
箇小しうふりて
句申に其終のめ
字は小終なるめ
あり。邪の字はゆ
疑ひ怪しき事なる
ころのゆかりあり

其の字はこゝにその
事物に括くして
於の字は俗終。這
箇小しうふりて
句申に其終のめ
字は小終なるめ
あり。邪の字はゆ
疑ひ怪しき事なる
ころのゆかりあり

其の字はこゝにその
事物に括くして
於の字は俗終。這
箇小しうふりて
句申に其終のめ
字は小終なるめ
あり。邪の字はゆ
疑ひ怪しき事なる
ころのゆかりあり

其の字はこゝにその
事物に括くして
於の字は俗終。這
箇小しうふりて
句申に其終のめ
字は小終なるめ
あり。邪の字はゆ
疑ひ怪しき事なる
ころのゆかりあり

其の字はこゝにその
事物に括くして
於の字は俗終。這
箇小しうふりて
句申に其終のめ
字は小終なるめ
あり。邪の字はゆ
疑ひ怪しき事なる
ころのゆかりあり

成己仁也成物知也性之德也合外
内之道也故時措之宜也

右第二十五章

故至誠無息不息則久久則微微則
悠遠悠遠則博厚博厚則高明博厚
所以載物也高明所以覆物也悠久
所以成物也博厚配地高明配天悠

久無疆如此者不見而章不動而變
無爲而成天地之道可一言而盡也
其爲物不貳則其生物不測天地之
道博也厚也高也明也悠也久也今

夫天斯昭昭之多及其無窮也日月
星辰繫焉萬物覆焉今夫地一撮土
之多及其廣厚載華嶽而不重振河

也以後分終のめ

者其然と云に
答ふ也。也。云々
と後釋して
これ應じ
之諸

之の字は格あり
大成之殿指世殿
大成殿也。之字ハ
多く底の字云々
あり諸之の字釋
之同義なり却て
あり則諸の字を
審ふ同くしむる
然るに其れ云々

まに斯のん諸
まに斯のん諸のじ
而
是句の老轉折
け聲を平て記く
之成てまをわ
るは句の首に西の
字はるを又是上乃
ふをうけく轉で
下の字成は句の
末小而の字は
初ては流注の
助が今の字を相
類と
別

海而不洩萬物載焉。今夫山。一卷石
之多及其廣大。草木生之禽獸居之
寶藏興焉。今夫水。一勺之多及其不
測。黿鼉蛟龍魚鼈生焉。貨財殖焉。詩
云。維天之命。於穆不已。蓋曰天之所
以爲天也。於乎不顯。文王之德之純
蓋曰文王之所以爲文也。純亦不已。

右第二十六章

大哉聖人之道。洋洋乎發育萬物峻
極于天。優優大哉禮儀三百威儀三
千。徒其人而後行。故曰苟不至德至
道不凝焉。故君子尊德性而道問學
致廣大而盡精微。極高明而道中庸
溫故而知新。敦厚以崇禮。是故居上

此は是上の言あり
に下とく下はは
哉カヤ

句絶く嗟歎の意
あり尚書小島の曰
愈哉左氏傳に
公の曰諾哉といふ

いふと向の却て
いふと好く好くして
いふと好く好くして
いふと好く好くして
いふと好く好くして

君より好く好く
いふと好く好く
哉乎哉の類あり
あく貴あり宜
く扱とらに治て
これと味ふべ
故

不驕爲下不倍國有道其言足以興
國無道其默足以容詩曰既明且哲
以保其身其此謂與
右第二十七章
子曰愚而好自用賤而好自專生乎
今之世反古之道如此者裁及其身
者也非天子不議禮不制度不考文
今天下車同軌書同文行同倫雖有
其位苟無其德不敢作禮樂焉雖有
其德苟無其位亦不敢作禮樂焉子
曰吾說夏禮杞不足徵也吾學殷禮
有宋存焉吾學周禮今用之吾從周
右第二十八章
王天下有三重焉其寡過矣乎上焉

是故
發於端瓜瓞之辭

亦其其説...
有之...
此以...
故曰

乃...
有...
説道...
亦

是俗...
意亦...
謂...
亦...
亦...
亦...

寛...
用...
爲...
視...
乃...
後...
乃...
乃...
乃...
乃...

者雖善無徵無徵不信不信民弗從

下焉者雖善不尊不尊不信不信民

弗從故君子之道本諸身徵諸庶民

考諸三王而不繆建諸天地而不悖

質諸鬼神而無疑百世以俟聖人而

不惑質諸鬼神而無疑知天也百世

以俟聖人而不惑知人也是故君子

動而世爲天下道行而世爲天下法

言而世爲天下則遠之則有望近之

則不厭詩曰在彼無惡在此無射庶

幾夙夜以永終譽君子未有不如此

而蚤有譽於天下者也

右第二十九章

仲尼祖述堯舜憲章文武上律天時

後於辭又邪
のまあり

干

是那の夏物あり
の地名れ類なほ
言故一の干乃字
に著くもつてこれ
を指定ひ於の字
と相類はさるる
於此も定略重
亦夏為類はて
所能所字の類
と干の字東は

是ハ指所乃義字
と同一の字所
の字ハ活于此字を
死なり
所ハ
是ハ必くと夏衣
同くも夏衣とせ
固於て有り故に
今くこの一
或
疑ひの辭と帯れ
のありの字と定
ざり乃意と帯る
あり其人を指し
まはすと指し

下襲水土辟如天地之無不持載無

不覆情辟如四時之錯行如日月之

代明萬物並育而不相害道並行而

不相悖小德川流大德敦化此天地

之所以為大也 右第三十章

唯天下至聖為能聰明睿知足以有

臨也寬裕溫柔足以有容也發強剛

毅足以有執也齊莊中正足以有敬

也文理密察足以有別也溥博淵泉

而時出之溥博如天淵泉如淵見而

民莫不敬言而民莫不信行而民莫

不說是以聲名洋溢乎中國施及變

貊舟車所至人力所通夫之所覆地

之所載日月所照霜露所隊凡有血

氣者莫不覆之

下の文も...
 の意を揚えん欲
 と故先此成りて
 嗚呼 嗚呼
 其意重し切なり
 呼も亦後後之辭
 手を拊輕し此
 言先歎息して後
 語をせんと更に
 於の字あり音嗚
 呼中歎の辭當書
 以馬のいふ於未
 物とい嗚の字を

而約言之其反復丁寧示人之意至
 深切矣學者其可不盡心乎

中庸終

書...
 一際に總説の意
 若遺後或の意
 聊爾且如此の意
 断然とて決定
 て易さぬの意
 世餘ありと云ふと
 小字紙上授...
 て奥旨成まると
 名入し

寛政九年丁巳秋八月

書肆

江都本町筋北へ丁目通油町
 鶴屋喜右衛門梓

卷之四
水
夕
在
流

山
氣
長
移
共

首
口
根

入
名
河
遠
風

隨
如
頭